

二〇一二年 卒業論文

浄土真宗の躍進にみられる蓮如の力

L090093

霍野 廣大

	目次	
	序論	4
	本論	5
	第一章 蓮如の生涯	5
	第一節 蓮如の誕生と実母の願い	5
	第二節 蓮如の得度	6
	第三節 蓮如の家族	7
	第四節 蓮如教学の基礎	8
	第五節 蓮如による本願寺の躍進と伝道	9
	第二章 本願寺の躍進につながる蓮如像	10
	第一節 人間蓮如	10
	第二節 上人蓮如	14
	第一項 組織者蓮如	14
	第二項 伝道者蓮如	16
	第三項 信仰者蓮如	18

第三章 『御文章』の發揮	19
第一節 『御文章』の基盤と背景	19
第一項 『御文章』と『教行信証』	19
第二項 『御文章』と『歎異抄』	22
第二節 『御文章』にみられる異義打倒	25
第一項 異義の内容	25
第二項 「信心正因」「称名報恩」の義	28
結論	30
註	
参考文献	

## 序論

浄土真宗は、現在日本において最大の仏教教団であり、中でも浄土真宗本願寺派は最も多くの門徒を擁している。しかし、初期の本願寺というものは、極めて小規模の坊舎であり、凋落の様相であったといわれている。

そのような本願寺の低迷を一気に打開し、本願寺を真宗諸派の中心的存在におしあげるとともに、東海、北陸、畿内を覆う巨大な宗教王国を築きあげたのが、本願寺第八代宗主蓮如である。浄土真宗の躍進には、蓮如の力は必要不可欠であった。その功績がたたえられ、今もなお「御再興の上人」や「中興の祖」と呼ばれ、また敬われているのである。

だが、先哲の中には、蓮如の功績について、門徒を多く獲得し本願寺を組織として大きくしただけだと理解する人もいる。そして、時には親鸞の教えを歪曲しているとし、批判を受けることも多々ある。浄土真宗本願寺派の歴代宗主において、これほどまでも賛否両論が分かれる宗主は蓮如ぐらいであろう。

このような蓮如に対する理解について、様々な見解が挙げられるが、浄土真宗を研究する上で蓮如が重要な人物であることは間違いない。すなわち、現在の浄土真宗、そして、本願寺がこれほどまでも躍進した背景には、蓮如が大きく影響を及ぼしていることは疑いようのない事実である。

これらの事柄に関連して本論文では、浄土真宗の躍進にみられる蓮如の力とは果たして何であったのか、そしてその根底には何が隠されているのかについて考察を進めていくこととする。

## 本論

### 第一章 蓮如の生涯

#### 第一節 蓮如の誕生と実母の願い

本章では、先行研究の蓮如伝に関する成果を踏まえ、それを結合し考察することにする。(1)  
浄土真宗本願寺派において、「中興の祖」とされる蓮如は、応永二十二年(一四一五)二月二十五日に、京都東山の大本願寺で生を受けた。童名は布袋丸または幸亭丸、諱は兼寿、号は信証院である。

父は、本願寺第七代宗主存如であり、実母の出自について『大谷本願寺通紀』では、「何許人か知れず(2)」と記されており、未だに詳細については不明である。しかし、蓮如の実母について『拾塵記』には、「存如上人先妣ノ御方ニ常随宮仕人ニ侍リキ(3)」と記されている。「宮仕人」とは当時女房の事を指していた。したがって、本願寺第六代宗主巧如の妻に仕えていた女房であることは確かである。蓮如の実母は、本願寺への女中奉公の身であったために、存如の正妻におさまることなど全く考えられなかった。

そんな中、存如の正妻として、幕府の奉行海老名氏の娘である如円尼を本願寺に迎え入れるという話がまとまる。そのような状況になると蓮如と実母は本願寺にとつて、いろいろな点で不都合であった。そのこともあって、実母は、我が子蓮如の将来のためにもいつかは本願寺を去ろうと心に決めていたようである。だが、幼い蓮如がもの心つくころまではそばにいてやりたいという気持ちが強く、周囲の冷たい目を体中に痛いほど感じながらも、じっと耐えていたとされている。我が子に対する気持ちと様々な苦しみとの葛藤の日々であった。

応永二十七年（一四二〇）十二月二十八日の夜、ついに実母は蓮如を残したまま、本願寺から身を隠す決意をし、いずこともなく姿を消した。蓮如六歳の時である。実母は、蓮如のことを思い、せめてもの形見として残すために、我が子との別れに際して鹿の子絞りの小袖を着させ、絵師にその姿を描かせた。また、立ち去り際、蓮如を抱きあげ、静かに、そして強い気持ちで込めて短い言葉を残したとされる。

ネガハクハ兒ノ御一代ニ聖人ノ御一流ヲ再興シタマヘ<sup>(4)</sup>

この時実母は、別れの涙をみせなかった。六歳の蓮如に、悲しい離別をさとられまいと思つたからである。以後、遺言にも似た実母の言葉は、波瀾に満ちた蓮如の生涯を通し、いかなる受難迫害の中にも慈母の声としてよみがえる。そして、蓮如を強く温かく支えていく。

## 第二節 蓮如の得度

実母が本願寺を去った後、存如は正妻として如円尼を迎え入れる。蓮如は、この継母如円尼によって養育されることになる。存如と如円尼との間には、応永三十年（一四二三）に娘如祐が生まれ、蓮如が十九歳の時までには、一男三女の腹違いの弟妹が生まれた。その一男が応玄であった。如円尼は自分の腹を痛めた応玄が生まれたからには、将来の本願寺宗主の座を我が子にと思い、蓮如が邪魔な存在となり、警戒の念を強めていた。

この頃の本願寺は、「寂々としておわします。参詣の人ひとりも無し。<sup>(5)</sup>」と噂されるほどであり、また極めて小規模の坊舎であり、凋落の様相であったといわれる。財政的にも厳しく、その生活は想像をこえた苦しいも

のであった。蓮如が、このような状況である本願寺の再興を志したのが十五歳の時である。それ以後、四十三歳の時まで継母如円尼との確執により部屋住みの生活を送る。

永享三年（一四三一）夏、十七歳になった蓮如は、天台宗門跡寺院の青蓮院で得度をして「蓮如」という法名を授かる。親鸞と同じように、青蓮院で蓮如が得度することはとても意味深いことである。本願寺における後継ぎの存在を、より明確に宗派内に伝えるためにも、蓮如の得度は期待された儀式であった。また同時に、日野一門で公家の広橋兼郷の猶子となり諱を兼寿と称した。これは、本願寺と日野氏一門との縁を確認しあう慣行にちなんでいる。

### 第三節 蓮如の家族

蓮如は、八十五歳で往生するまでに五人の正妻を迎え、十三男十四女に恵まれた。初婚の年月については、嘉吉元年（一四四一）の二十七歳ごろと推測されており、妻は伊勢貞房の娘であった如了尼で、四男三女に恵まれたが、蓮如が本願寺宗主を継職する前々年の康正元年（一四五五）に逝去した。また二度目の結婚の妻は、前妻の妹の蓮祐尼であり、三男七女に恵まれたが、文明二年（一四七〇）に没した。子女については、長男の順如は手元で生育したが、他はそれぞれ寺院や他家に出されたとされる。<sup>6)</sup>

蓮如は、幼少にして実母と別れ、継母に養育され、結婚以後は子どもとの別離という悲しい経験をされたと伝えられている。蓮如の人柄は、情緒に富んだ人情的な面を持っており、例えば遠路遙々訪ねてきた門徒たちに対

して、冬は熱燗、夏は冷酒をふるまうなどの気遣いをされた。そのような蓮如の性格からすれば、困窮生活のゆえに子どもたちと暮らせないことは、痛恨の極みであったに違いない。

#### 第四節 蓮如教学の基礎

こうした苦難の中で、蓮如は懸命に宗学の研鑽を積んだ。特徴として、一般の仏教教学を学ぶというより、浄土真宗の根本聖教である『教行信証』に土台をおき、親鸞や覚如など先師の諸著述を書写、研鑽という方法をとった。特に、蓮如を魅了したのは『安心決定鈔』であった。読み破れたため三度も本を取り替えている。親鸞の『教行信証』や存覚の『六要鈔』も表紙が破れるほど読破し、研鑽を積み重ねた。<sup>7</sup>若年時代から続けられていたこれらの研鑽が、後の伝道の基礎になったことはいまでもない。

康正三年（一四五七）、存如が六十二歳で逝去する。この葬儀をとりしきったのは異母弟応玄である。葬儀の中心者となることは、次代の継職者であることを予告する意味を持っていた。また、如円尼も実子である応玄を継職させようとした。しかし、叔父である如乗による譲り状重視の主張により、異母弟応玄との本願寺第八代宗主の座の争いにおいて、蓮如は応玄を退ける。

その結果、蓮如は、長禄元年（一四五七）四十三歳の時に本願寺第八代宗主となる。宗主の座の争いに敗れた応玄は、如円尼と共に、本願寺の土蔵をほとんど空にして加賀の大相谷に身を隠した。土蔵の中には、僅か一尺ほどの味噌桶一つと銭百疋だけが残されていたとされる。



## 第五節 蓮如による本願寺の躍進と伝道

本願寺宗主を継職した蓮如は、まず礼拝の対象である本尊の統一と制定をし、またその授与を行い、阿弥陀仏への帰依と親鸞への報恩感謝の考えを門徒に説いた。これにより、今日における寺院形態が整う。しかし、本願寺は様々な法難を受けることとなる。寛正六年（一四六五）には、二度にわたり東山の大谷本願寺は比叡山の衆徒の襲撃を受け破壊される。蓮如はその後、河内、摂津、野洲などの各地の道場を転々とする。

そして、多くの苦難に遭いながらも文明三年（一四七一）に福井県の吉崎に赴き、吉崎御坊を建立する。吉崎は、北陸の交通の要地であり、三方を海に囲まれた要害の地でもある。守りやすく攻めるには難しい吉崎の立地条件は、戦国乱世に民衆宗教の組織者が身を置くには最適な地であった。この北陸の地で、エネルギーな念仏の布教を展開する。また、吉崎進出後から『御文章』による文書伝道も活発に行われた。そして、文明五年（一四七三）には、『正信偈』に和讃を付した『正信偈和讃』を開版された。蓮如の鋭い布教により、加賀、越中、能登、越前はいまでもなく、信濃、奥州などからも出家、在家の男女が群れをなして吉崎を訪れるようになる。

しかし、吉崎の盛況は蓮如の予想をこえたものであった。蓮如は、吉崎に赴いて半年も経たないうちに、門徒たちの吉崎群参を禁止した。これは、加賀、越前の守護や他宗の寺からの非難と弾圧を予想したからである。だが、門徒たちは吉崎群参禁止の命令を無視し、吉崎の地は混乱することになる。このまま進めば、守護勢力や寺院勢力による吉崎への武力攻撃は不可避であった。不慮の事態を未然に防ごうとした蓮如は、吉崎を退去し、畿内に戻り、その後、河内、摂津、堺の坊舎に居住した。

文明十年（一四七八）には、山科に坊舎が建てられ、文明十五年（一四八三）には、山科本願寺の建立が完成した。さらに、明応五年（一四九六）には、大坂石山に坊舎を建立した。蓮如は、この場所を大坂御坊と称して存分に気に入られ、入滅の場所とも考えていたとされる。明応七年（一四九八）、八十四歳になった蓮如は、身体の不調を覚える。病名は定かではないが老衰と伝えられる。翌年の明応八年（一四九九）二月、死期が近いことを意識した蓮如は、大坂御坊内に葬所を設けさせ、ここで死を迎えようとした。しかし、急に山科本願寺の本坊に帰られた。これは、実如の懇願によるものであるとされる。そして、明応八年（一四九九）三月二十五日、八十五歳で山科本願寺の地で往生を遂げる。

## 第二章 本願寺の躍進につながる蓮如像

### 第一節 人間蓮如

浄土真宗の躍進にみられる蓮如の力を考察する時、まず蓮如の人間像を理解することが非常に重要である。ここでは、ひとりの人間としての蓮如、つまり「人間蓮如」の姿を追っていく。

蓮如が生きた室町時代は、戦国の乱世であり、非常に荒々しい時代であった。幕府や朝廷の権威は地に落ち、下剋上が始まった時代でもある。それにともない戦乱が絶え間なく続き、加えて天災が人々を襲う。そして、農民の一揆が頻発し、さらに相続争いに端を発した「応仁の乱」が起こったことにより、世の中は乱れた。倫理も

道徳も破壊され、人々は自分が何のために生まれ、何のために生きていくのか分からぬまま死んでいくというような時代であった。そんな時代において蓮如は、臨機応変に対応し、抜群の決断力、想像力、行動力、指導力という資質を発揮した人物であった。その力の裏には、強い個性が隠されている。山折哲雄氏は、その蓮如の個人的な姿を次のように論じている。

日蓮宗の日親も臨済宗の一休も強烈な個性を持つ人物であったということがわかるであろう。その行動には常人の度肝を抜くようなところが、たしかにある。しかしながらこの室町時代という動乱の時代を、もっと大きな身振りで力強く生き抜いた宗教家となれば、それはやはり蓮如の名を挙げなければならないのではないのでしょうか。蓮如は文字通りこの時代を代表する個性豊かな宗教家であったと思う。(8)

これにより蓮如は、行動力に満ちた不死身の日親や、異端な人物で知られながらも、日本仏教史において最も有名であると言っても過言ではない一休をも凌ぐ個性的なキャラクターを持ち合わせていたことが窺える。これだけで、「人間蓮如」の個性的な姿が容易に想像できる。

「人間蓮如」の姿を追う上で、宗祖である親鸞と蓮如の人間性の違いも論じる必要がある。蓮如は、親鸞が師匠である法然に全力で帰依したのと同じく、親鸞に全力で帰依した。親鸞の純粋な思想が混乱し、人々に忘れられていく時代に生まれた蓮如は、宗祖である親鸞を偲びつつ「親鸞にかえれ」と全力をふりしぼって叫び続けた人物である。しかし、親鸞と蓮如の人間性を比較した時、異なる要素が多々ある。

親鸞と蓮如、両者は生まれた環境も育った環境も異なる。これは、人間性の形成過程において、とても大きな

影響が及ぶことになる。また、蓮如は本願寺に生まれた。このことは、蓮如の生き方を支配する極めて大きな条件である。

もともと親鸞は、寺の子ではなく貴族の家の生まれである。既成仏教の開祖である、日蓮、空海、最澄、道元、法然も寺では生まれていない。親鸞は、出家して比叡山で修行した後「非僧非俗<sup>(9)</sup>」の立場をとった。「僧にあらざ、俗にあらざ」という立場は、当時の仏教の世界では常識外れであり、大きな寺とは無縁の一生であった。

しかし蓮如は、本願寺という寺に生まれ、生まれた時から、寺の子として様々な研鑽を積むことになる。蓮如は、本願寺に生まれたことによって、法灯を受け継ぎ、「聖人ノ御一流ヲ再興シタマヘ<sup>(10)</sup>」という実母からの願いを託された。これらは、蓮如にとって多少なりともプレッシャーとなっていたと考えることもできる。その反面、プレッシャーが蓮如の力の糧になったともいえる。蓮如には、親鸞が灯した光の伝道者として期待されたからこそ、ざつくばらんで、人間臭い、人間性が必要とされていた。その人間臭さを、蓮如は持ち合わせていた。それを象徴する出来事として、蓮如が実如に本願寺の宗主の座を譲った際、「功成り名遂げて身退くは天の道なり<sup>(11)</sup>」と述懐したことが挙げられる。この言葉は、もともと老子によるものとされるが、蓮如がこの言葉を用いて、自身の歩んできた道を振り返ったことについて、非常に人間臭さを感じることできる。しかしこれにより、蓮如はしばしば批判を受ける。菊村紀彦氏は、この言葉を受け蓮如について、

果たして、名もなく、貧しく、寺も持たなかった親鸞その人の歩いた道であったのだろうか。たぐい稀な布  
教家：オルガナイザーの蓮如は、親鸞の心を心として組織づくりに成功したといわれているが、しかし、大

きくかみあわないところがなかったらどうか。(12)

との批判的な見解を示し、親鸞と蓮如の心のズレ、人間性の違いを問題視している。この指摘に対し、なぜ親鸞と蓮如の人間性や性格を同一視しようとするのか、理解に苦しむ。親鸞の人間性と蓮如の人間性は異なることに意味があるのではないのだろうか。

そのような批判的見解がある一方、大村英昭氏は、

世に「判官びいき」などと言う。確かに、「功成り名遂げた」人物より、そうでない悲劇の人に同情するのは、ごく自然な庶民感情であろう。だが、ある人物の歴史的業績を評価するのに、時には、この庶民感情が邪魔になる。成功の故にかえって嫌われ、それこそ「坊主憎けりや、袈裟まで憎い」式に、その人物のすべてが低く見積もられかねないからである。(13)

と論じ、「功成り名遂げる」ことが、そもそも宗教者にはふさわしくないとのおもひ込みも、実はおかしいのであるとの見解を示している。その誤った先入観の被害者こそが、蓮如だといえるだろう。

伝道者である蓮如が、求道者であった親鸞と同様の人間性を持っていたならば、果たして浄土真宗、そして本願寺の躍進というものはみられたらどうか。躍進どころか、法灯が失われていた可能性も十分に考えられる。今一度、本願寺の躍進というものを研究する時、「人間蓮如」、すなわち蓮如の人間性を考察することは、非常に有意義なことである。

## 第二節 上人蓮如

### 第一項 組織者蓮如

蓮如像というものを正確に捉えようとした時、「人間蓮如」と共に、本願寺第八代宗主としての蓮如、つまり「上人蓮如」の姿を追う必要があるといえる。源了圓氏によると、

蓮如には組織者、伝道者、信仰者の三つの側面を持った人であり、卓越した組織者、伝道者としての行動力の根底に、純一で敬虔な信仰があつたといわれる。(14)

このことから、「上人蓮如」という存在は、組織者、伝道者、信仰者という三つの柱を持っていたと考えることができる。卓越した組織者、伝道者としての行動力の根底には、間違いなく厚い信仰心があつた。これは、蓮如が強調した「自信教人信」に裏付けされる。自らの信心が無くしては、人々に真実の信心を伝え、獲しむることは不可能なことである。

組織者としての蓮如は、素晴らしい功績をあげ、本願寺を躍進させた。本願寺はもともと本願寺第三代宗主覚如によって創設された。覚如という人物は、「三代伝持」の血脈を駆使し、自らの正当性を説いた。この「三代伝持」の三代とは、法然、親鸞、如信であり、教えの正当性を引き継ぐのは、覚如しかいないという論理である。この覚如には、関東の門徒たちとの壮絶な争いがあり、十二条からなる誓約状を関東の門徒に提出するなど屈辱的な体験をしている。覚如は、様々な困難を経て苦難の末、本願寺を創設した。

しかし、親鸞は、「弟子一人ももたず候。(15)」と断言し、伽藍仏教も明白に否定している。その観点からする

と、覚如が志向した方向は間違っていたと指摘されても仕方がない。だが、すでにそのころ、親鸞の否定する教団は、関東その他の地にくつか出現しており、しかもそれらの教団は親鸞の教義を歪曲した異端の教えを説いていた。そのため、親鸞の教えを正確に世に広めようとするなら、覚如も教団を組織して立ち向かうしか方法は無かったと考えられる。

覚如の没後、本願寺の宗主は善如、綽如、巧如、存如と継職されるが、寺影さえなく、寂々とした状態が続く。そのような本願寺の低迷を一気に打開し、本願寺教団を真宗諸派の中心的存在におしあげるとともに、東海、北陸、畿内を覆う巨大な宗教王国を築きあげたのが、本願寺第八代宗主蓮如である。その組織者としての蓮如の成功の裏には、室町時代という時代を冷静に読みきり、権力との衝突を最小限にして教線の拡大をはかったこと、あるいは「講」組織を核にして村落共同体の中に、組織の網を張ったということが隠されている。この「講」によつて巧く門徒を組織化し、集団的な話し合いの場を重層的に作りあげ、その場に蓮如は『御文章』を投げ入れ、浄土真宗の教えを分かりやすく説いた。蓮如は、「講」という開かれた信仰共同体を巧みに使い、浄土真宗の教えを民衆の家庭生活の中に浸透させていったのである。

そして蓮如は日頃から、「門徒にもたれたり」と。ひとへに門徒にやしなはるるなり。(16)と語り、常に門徒と自己の幸せを切り離さなかった。さらに、門徒と接する時は、常に平座をとった。組織の指導者として、高い座に位置してこそ権威を保てるという考え方もあるが、蓮如は常に門徒との距離を重視した。門徒との対話の席を平座にしたことは、当時の常識を破った行為でもある。説く者も聞く者も同座にしたところに、浄土真宗の人間

関係の「御同朋、御同行」の精神が窺える。これにより、当時の仏教世界では常識の「縦社会」の構造の中に、「御同朋、御同行」の精神により「横社会」の組織が形成された。

また、蓮如はよく「イノベーター」と論じられることがある。蓮如上人五百回遠忌のテーマも「イノベーション」であった。「イノベーション」は「変革」という日本語によく訳される。しかし、蓮如が行った「イノベーション」は、「変革」というよりも「組み替え」や「発展」という日本語のニュアンスに近いと考える。つまり、内部は変えないままに、外部を変えるということである。

蓮如は、決して創造者でもなければ創始者でもない。「講」組織も、蓮如が発明したものでなければ、創造したものではない。日本の村落に既に存在していた基層民間のムラ信仰の民俗制度を巧く発展させたものである。

このように蓮如は、常に新しく創造、発明するのではなく、基層に既存にしているものを巧みに吸収し組み替え、発展させていった。そこに蓮如の組織者としての巧さと成功があったのである。

## 第二項 伝道者蓮如

しかし、「上人蓮如」の姿を追いかけるとき、組織者としての蓮如だけではまだまだ物足りなく感じる。源了圓氏は「蓮如は卓越した組織者ではあったが、それは世俗集団の組織者ではなく、宗教集団の組織者である。単なる組織者ではその集団は、宗教集団としては成り立たない。い」と論じている。確かに、世俗集団の組織者と宗教集団の組織者では一線を画すところがある。果たして、宗教集団の指導者にとって必要不可欠なものとは何な



のか。蓮如は、卓越した宗教集団の組織者であった。そこには間違いなく信仰があり、それを裏付ける教義がある。そして宗教集団が形成される過程において何より伝道的情熱がなければならぬ。この点が、宗教集団の組織者にとって必要不可欠なものだと考える。

蓮如の成功は、伝道の成功であったといっても過言ではない。親鸞が求道者として生き、「浄土真宗の教え」を説き続けたのに対して、蓮如はその教えの継承者として生まれ、親鸞の教えを正しく人々に伝える使命を背負っていた。その伝道の中心的役割を担ったのが、『御文章』である。この『御文章』への工夫は、時代の要求に一致していた。蓮如が生まれ、そして活躍した室町時代は、民衆の価値観が多様化し、自らの力を自覚し始めた時代である。だが、民衆は仏教世界から取り残された存在でもあった。世の中の人々は、真に生きる心の依りどころを見失い、どうしたら救われるのかと迷い続けていた。そのような民衆に対して、伝統的な仏教漢文による伝道ではなく、仮名文字混じりの平易で、尚且つ要点を抑えた簡潔な言葉で「浄土真宗の教え」を著したのが『御文章』である。この『御文章』は、組織化された門徒において絶大な影響を及ぼした。この『御文章』による、文書伝道は蓮如の成功の大きな要因である。

また蓮如は、教団の繁盛、繁栄を考える上で、信心を重要視している。蓮如は、「一宗の繁昌と申すは、人のおほくあつまり、威のおほきなることにてはなく候。一人なりとも、人の信を取るが、一宗の繁昌に候。(18)」とし、参詣者の数ではなく、ただ一人の信仰者を求めていた。ここに、伝道者としての蓮如の本質をみる事ができる。

### 第三項 信仰者蓮如

ここまで、「上人蓮如」を組織者、伝道者という二つの側面から論じてきた。だが、「上人蓮如」を正確に理解する上で、信仰者という側面は絶対に論じなければいけないと考える。それは、「自信」に基づいた「教人信」の実践者であるからである。

ただ蓮如には、多くの宗教者にみられるような廻心の体験が語られていない。このことに関して、源了圓氏は「確かに蓮如自身のことばのどこを見ても、入信に至る苦悩、絶望、挫折の心的過程を語ることばは見られない。

またどの蓮如伝を見てもそのような事実の跡づけを探し出すことはできない。(19)」とし、入信に至るような精神的なドラマを宗教家に求める近代人にとっては、蓮如は極めて近づき難い宗教家であると評している。

しかし、これだけで蓮如に信仰や信心がなかったとは、決して言えない。廻心の体験が語られていないだけで、蓮如の信心を疑うのはナンセンスである。そもそも、他人の信仰や信心を疑うということ自体があるまじき行為である。

蓮如の『御文章』や様々な言行録などを通読すると、純一で敬虔な信仰を窺うことができる。特に、『御文章』では信心について多く語られ、信心一つが往生の因であることは『御文章』に一貫する立場である。また、浄土真宗の教えの中心は「信心為本」であると強調されている。これだけ信に人生の機軸をおき「教人信」に生涯を捧げた蓮如に、「自信」が備わっていなかったとは到底考えられない。

もし蓮如に篤い信仰心や信心がなければ、本願寺の躍進はあり得なかつただろう。蓮如の時代に、老若男女を

問わず多くの門徒を獲得したこと、法敬坊、金森の道西、赤尾の道宗などの門弟や妙好人の心を魅了したことの背景には、間違いなく蓮如の純一で敬虔な信仰があったからだといえる。

組織、伝道、信仰という三つの側面によって、ようやく「上人蓮如」という姿がはっきりとみえてくる。この三つの側面のうち、一つの側面でも欠いたならば、「上人蓮如」は成り立たない。

「人間蓮如」、そして組織者、伝道者、信仰者の三つの柱から成る「上人蓮如」により、初めて本当の蓮如像を理解することができる。この蓮如像が、本願寺の躍進にみられる蓮如の力に大きく影響していることはいうまでもない。

### 第三章 『御文章』の發揮

#### 第一節 『御文章』の基盤と背景

##### 第一項 『御文章』と『教行信証』

浄土真宗、そして本願寺の躍進にみられる蓮如の力を考察する上で、『御文章』については、必ず触れなければならぬ。それは、『御文章』が蓮如の主著であり、尚且つ親鸞の教えをかみくだき、誰にでも理解できるように簡潔に著されているからである。

その『御文章』について、『蓮如上人御一代記聞書』によると、

『御文』はこれ凡夫往生の鏡なり。(20)

とされ、『御文章』は煩惱具足の凡夫が浄土往生する道を照らしだす教えの鏡であると示されている。また、『蓮淳記』では、

其時教行信証六要鈔表紙の破れ候ほど御覽候て、其後御文を御作候。これ千の物を百にゑり百の物を十にゑり十の物を一にゑりすぐりて、凡夫直入の金言を撰み、いかなる者も聞得、やがて信をうるやうにあそばし候。(21)

とあり、親鸞の名著『教行信証』を解釈し、一文不知の凡夫にも分かりやすい表現を用いて書かれていることが分かる。さらに、『帖外御文章』の第五十三通目では、

于今教行信証之名義耳の底に止て人口にのこれり。可貴可信は唯この一大事なり。(22)

と記されており、真実の信の獲得を蓮如は勧め、『教行信証』を尊び、信ずるべきであるとしている。つまり、『御文章』の中心にあるのは、『教行信証』であり、『御文章』を考察する時、『教行信証』との結びつきを強く意識しなければならぬ。

蓮如は、法然、親鸞のごとく劇的な廻心という事項には当て嵌まらないが、本願寺の血脈の中に生まれたことにより、父である存如の指導のもと多くの聖教を書写した。中でも、『教行信証』の書写が最も多く、二十歳から七十五歳までの間に、計六度も書写を行っている。(23)蓮如が八十五年間の生涯において、六度も『教行信証』を書写したことは、他の聖教と比べてみると、ずば抜けて多い。ここに、蓮如教学の中心が『教行信証』を看過

しては、決して理解できないということが知らされる。

『教行信証』の中心は、「真実の信」と「方便の信」、すなわち「他力の信」と「自力の信」の真仮をはっきりとさせるところにある。稲城選惠氏は『教行信証』の概要として、

宗祖聖人の教学は勿論『教行信証』一部六巻を以てその中心とする。『教行信証』一部六巻は一言にしてつくすと、何をいつているのであろうか。それは十八願と二十願の立場の相違を明らかにされたものといわれる。(中略)更に具体的にいうと他力の信心―十八願―と自力の信心―二十願―の内容を明らかにし、その朱紫の混同を明らかにされた安心の書ということが出来る。(24)

といわれている。つまり『教行信証』は、「他力の信心」を明らかにするために、混同されやすい「自力の信心」の立場との相違を鮮明にすることに重点をおいていると考えられる。そのため、「信巻」には別序を設け、安心を強調している。浄土真宗において安心とは、「自力の信心」を廃して、「他力の信心」によって大涅槃の妙果を得ることである。『教行信証』では、「他力の信心」のみが報土得生の真因、つまり信心正因であることが明らかにされているのである。これは、『御文章』製作の基盤にもつながる。

親鸞は、主著である『教行信証』にみられるように、生涯をかけて「他力の信」を明らかにしようとした。その思いを最も消化したのが蓮如であり、蓮如の主著『御文章』である。それ故、『御文章』において一貫する立場は、「信心正因」、「称名報恩」である。それを表す特徴的な『御文章』が、二帖目第三通である。

しかれば祖師聖人(親鸞)御相伝一流の肝要は、ただこの信心ひとつにかぎれり。これをしらざるをもつて

他門とし、これをしれるをもて真宗のしるしとす。そのほか、かならずしも外相において当流念仏者のすがたを他人に対してあらはすべからず。これをもて真宗の信心をえたる行者のふるまひの正本となづくべきところ件のごとし。(25)

この文は、覚如が著した『改邪鈔』第十五条の文をそのまま受けているが、端的に親鸞の「信心為本」の定義を明確化している。また、『御文章』の五帖目第十通にも、

聖人（親鸞）一流の御勸化のおもむきは、信心をもて本とせられ候ふ。(26)

とあり、信心の強調が行われている。この信心とは、他力なる故に、自力の混入は許されないものである。蓮如ほど信心の強調をし、安心を明らかにした人はいない。親鸞の『教行信証』の真意を受け継ぎ、一文不知の凡夫にも通ずる端的な表現により明らかにされたのが、蓮如の『御文章』なのである。

## 第二項 『御文章』と『歎異抄』

『歎異抄』は『教行信証』と共に、『御文章』を考察する上で、非常に重要な書物である。その理由として、『御文章』を著した蓮如が『歎異抄』の発見者とされているということが挙げられる。現在、唯円房が著した『歎異抄』の原本は未だ不明であり、西本願寺蔵の蓮如上人書写本が最も古いとされている。(27)そのため、『歎異抄』に関する多くの書物は、蓮如上人書写本を基に書かれている。

『御文章』と『歎異抄』、この二つの書物はよく比較され、様々な評価が下される。稻城選恵氏は、「浄土真宗

の門徒はどの家庭でも仏壇に正信偈と御文章のない家庭はなからう。(28)としながらも、「現代人は御文章には余り魅力をもたないようである。むしろ歎異抄は一般に愛読され、特に知識人にも多く読まれているようである。(29)」といわれ、現代人の『御文章』離れを指摘している。確かに浄土真宗の書物として、『教行信証』や『御文章』よりも、『歎異抄』のほうが、読みやすく、親しみやすい性質を持っているのも事実である。それでは、果たして『御文章』と『歎異抄』に説かれる教えは、異なるものなのだろうか。

そもそも『歎異抄』という書物は、主に東国門弟の中で巻き起こった親鸞教学に反する異義を糺すために、親鸞面受の門弟唯円房によって書かれたものといわれる。『歎異抄』は、全十八条の中、初めの十条は親鸞の語録で構成され、後の八条はすべて異解を唯円房が批判するものとなっている。さらに序分には、

ひそかに愚案を回らしてほぼ古今を勘ふるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思ふに、幸ひに有縁の知識によらずは、いかでか易行の一門に入ることを得んや。まつたく自見の覚語をもつて他力の宗旨を乱ることなかれ。よつて故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むるところいささかこれをしるす。ひとへに同心行者の不審を散ぜんがためなりと云々。(30)

とあり、自己の偏見によって他力の宗旨を誤解し、乱すことを戒める目的で筆をとつたのだという製作の理由が述べられている。要するに、自見の覚語をもつて他力の宗旨を乱す者に対して、親鸞の正しい教学を示すために書かれたのが、『歎異抄』である。

『御文章』が書かれた時代もまた親鸞教学に反する異義が蔓延した時代である。「施物だのみ」や「口称正因(無

信単称)、「秘事法門」、「十劫安心」などの全く歪曲された親鸞教学が氾濫していた。その異義を糺し、親鸞教学を再興するために蓮如は、『御文章』を著したのである。これについて、『蓮如上人御一代記聞書』には、

聖人(親鸞)の御流はたのむ一念のところ肝要なり。ゆゑに、たのむといふことをば代々あそばしおかれ候へども、くはしくなにとたのめといふことをしらざりき、しかれば前々住上人の御代に、『御文』を御作り候ひて、「雑行をすてて後生たすけたまへと一心に弥陀をたのめ」と、あきらかにしらせられ候。しかれば御再興の上人にてましますものなり。(31)

とあり、蓮如は『御文章』を著すことによつて、異義を糺し、一般庶民にも理解しやすいように親鸞教学、つまり真宗安心を明らかにしたとされる。さらに、『御文章』による「親鸞教学の再興」こそが、蓮如が、「御再興の上人」や「中興の祖」と呼ばれる主な理由であるとしている。

先哲の中には、教団の発展面や組織者としての蓮如の側面から、蓮如を「御再興の上人」や「中興の祖」と論じる人もいるが、よくよく考えてみれば教団を初めて発展、躍進させたのは蓮如である。それ故、教団の発展面や組織者としての蓮如の側面から、蓮如を「御再興の上人」や「中興の祖」と論じるのは、適切ではないといえる。少なくとも、それは末であつて主な理由だと結論付けるには無理がある。しかし教学の面からいうと、覚如や存覚によつて討究された親鸞教学が、蓮如に至るまで、研究の空白時代があつたといわれる。これを再興したのが蓮如である。要するに、後生たすけたまへと一心に弥陀をたのむ他力の信心を明らかにしたところに、御再興といわれるゆえんがあると考えることができる。



また、『御文章』一帖目第一通には、「親鸞は弟子一人ももたず<sup>(32)</sup>」という『歎異抄』第六条からの引用文があり、『歎異抄』の影響を受けていたと考えられる。林智康氏も、

蓮如の『御文章』も直接的には覚如の『改邪鈔』等に見られる異義と同じで、さらにそれを展開された内容となつてはいるが、『歎異抄』第十五章の即身成仏章や第十八章の施量分報章等は、『御文章』の一益法門（滅度密益）——一帖目第四通・『帖外御文章』第一一三通——や施物だのみ（ものとり信心）——一帖目第十一通・三帖目第十通——等にも深く関わってくる異義である。従つて『歎異抄』の精神が蓮如の『御文章』にも継承されているものと思われる。<sup>(33)</sup>

とされ、『御文章』と『歎異抄』の共通する事柄を挙げながら、二つの書物の関係性を指摘している。

以上のことから、『御文章』と『歎異抄』に説かれる教えには通ずるものがあり、二つの書物の根底には、歪曲された親鸞教学を糺すという目的があつたといえる。

## 第二節 『御文章』にみられる異義打倒

### 第一項 異義の内容

蓮如は『御文章』において、浄土異流や親鸞教学を歪曲した真宗他派が説く様々な異義を問題視している。林智康氏によると、

蓮如時代の異義の傾向は、大体百年近く前の覚如の『改邪鈔』等に見られる異義と同じで、更にそれを展開

された内容のものが中心となる。(中略) 従って蓮如において取扱われている異義は覚如の時代より拡大しており、より具体的に多くの異義に対処されているのである。(34)

とされ、蓮如が立ち向かった異義は並大抵のものではなかったということが窺われる。

蓮如時代の代表的な異義として、「施物だのみ」、「口称正因(無信单称)」、「十劫安心」、「秘事法門」などがみられる。『御文章』において異義に関連するものとして、「施物だのみ」については七通、「口称正因(無信单称)」については九通、「十劫安心」については五通、「秘事法門」については二通あるとされる。(35) これらの異義に共通していえることは、信心とは何か、浄土往生の正因とは何か、ということに関して誤った理解をしているということが挙げられる。いつの時代においても、信心や浄土往生の正因を誤って理解する異安心の存在は避けて通れないものである。ここでは、『御文章』において多く記されている「施物だのみ」と「口称正因(無信单称)」の異義に触れながら、蓮如がどのような姿勢でその異義に臨み、またどのようにして異義打倒を展開していたのかについて、『御文章』を通して考察する。

まずは、「施物だのみ」について触れることにする。この異義は、よく寺院へ物や金品さえ寄進すれば、僧侶の力によって救われるとか、その功德によって浄土に往生できるという考え方である。この「施物だのみ」について、すでに『歎異抄』第十八条に、

仏法の方に、施入物の多少にしたがつて、大小仏になるべしといふこと。この条、不可説なり、不可説なり。

比興のことなり。(36)

とあり、唯円房の時代も「施物だのみ」の異義がみられたようである。

蓮如も「施物だのみ」の異義について、『御文章』一帖目第十一通に、

ちかごろは、この方の念仏者の坊主達、仏法の次第もつてのほか相違す。そのゆゑは、門徒のかたよりものをとるをよき弟子といひ、これを信心のひとといへり。これおほきなるあやまりなり。また弟子は坊主にものをだにもおほくまゐらせば、わがちからかなはずとも、坊主のちからにてたすかるべきやうにおもへり。これもあやまりなり。(37)

と記し、信心の誤った理解を指摘している。寺院や僧侶と門徒との間を媒介するはずである信心の関係が、物との関係に置き換えられている状況を蓮如は厳しく批判しているのである。坊主は、真宗教義を説くこともなく、また門徒も仏法を聴聞することなく、坊主に物をあげることによって自らも救われるという誤った理解は、現在の仏教教団にもみられるように感じる。この異義に対しての蓮如の姿勢は、現在の教団にも反省材料を与えるものであると考える。

次に「口称正因（無信单称）」の異義について触れることにする。この「口称正因（無信单称）」の異義は、浄土宗・鎮西流の影響を強く受けているものであり、自力口称念仏を勧め、口に「南無阿弥陀仏」とさえ称えたら浄土に往生できるとするものである。大原性実氏は、「口称正因（無信单称）」の異義について、

鎮西流の安心の混入であるといえる。(中略) 殊に口称を強調する鎮西派の流れが、蓮如当時の越前その他に流布して紫朱弁じ難きまでに混乱したようである。(中略) この無信单称・口称正因の異義の是正にはよ

ほど悩まされたと想像される。(38)

と論じている。それ故蓮如は、「口称正因（無信单称）」に対して批判する『御文章』を多く著している。『御文章』五帖目第十一通には、

それ人間に流布してみな人のころえたとほりは、なにの分別もなく口にただ称名ばかりをとなへたらば、極楽に往生すべきやうにおもへり。それはおほきにおぼつかなき次第なり。(39)

とあり、「口称正因（無信单称）」をはつきりと否定している。このような、「口称正因（無信单称）」の異義に対する『御文章』は、吉崎時代に書かれたものが多いことから、北陸を中心にして全国に「口称正因（無信单称）」の異義が広まっていたと考えられる。

## 第二項 「信心正因」「称名報恩」の義

これらの異義打倒のために、蓮如は、「信心正因」、「称名報恩」の宗義を明らかにした。信心一つが浄土往生の正因であることを示す「信心正因」、称名は報恩であることを示す「称名報恩」は、『御文章』において一貫する立場といわれる。これについて、神子上惠龍氏は、

御文全體が、この信心稱報の義を述べられたものといつても過言ではない。即ち蓮師の教化の骨子も全くこの信心稱報の義に存したのである。(40)

とされ、『御文章』において、「信心正因」、「称名報恩」の義が肝要であるということが窺われる。

「信心正因」について述べられる『御文章』の中でも、特に鋭い文言のものとして、『御文章』二帖目第七通と二帖目第二通が挙げられる。『御文章』二帖目第七通では、

信心ひとつにて、極樂に往生すべし。(41)

とあり、信心一つが往生の因であることを示し、『御文章』二帖目第二通には、

この信心を獲得せずは極樂には往生せずして、無間地獄に墮在すべきものなり。(42)

とあり、「無間地獄」という厳しい言葉を用いて、「信心正因」の義の強調が行われている。

そして、称名に関してはすべて報恩の義として解釈しており、『御文章』五帖目第十通などにみられるように、「そのうへの称名念仏は(43)」などと記し、称名の報恩なる義を明らかにしている。このことは、称名が正因ではなく、信心こそが正因なることを明らかにするためである。これについて、梯實圓氏は、

蓮如上人が、称名を報恩の一義に限定されたのは、称名は報恩のいとなみとして誓われていると限定することによって、往生の正因は信心のみであると、信心正因を明確にするためであった。(中略) 自力を捨てて他力に帰する宗教的回心もなく、ただ称名さえしておれば極樂に生まれられるというような世俗化した念仏を批判するためであった。(44)

といわれている。つまり蓮如は、「施物だのみ」や「口称正因(無信单称)」などの異義を打倒するために、「称名報恩」の義を明らかにし、「信心正因」の義を『御文章』において強く主張したといえる。

元来、「信心正因」、「称名報恩」の義をもって浄土真宗の浄土真宗なるゆえんとされる。稻城選恵氏も、

宗祖聖人の教学は、信心為本、信心正因の義を鮮明にされたところにある。(45)  
といわれ、梯實圓氏もまた、

蓮如上人は、浄土真宗の特色を表すのに、信心正因を親鸞教学の中核ととらえられた。(46)  
といわれている。蓮如は、「信心正因」、「称名報恩」の義こそが浄土真宗であり、親鸞教学であると解釈したことにより、『御文章』において、「信心正因」、「称名報恩」の強調を行ったといえる。だからこそ、「信心正因」、「称名報恩」の義によって異義打倒を展開していったのである。

#### 結論

浄土真宗、そして本願寺を躍進させた蓮如の力、さらにその根底には何が隠されているかということ、蓮如の生涯、蓮如像、『御文章』を通して考察を進めてきた。以下、これらをまとめて、結論としたい。

蓮如における全ての行動、著述、発言には、常に宗祖である親鸞の心を受け継ぎ、それらを明らかにするといふ願いが込められていた。要するに、蓮如は生涯において、「聖人一流の御勸化のおもむき」を正確に、また簡明瞭に伝えるということを徹底的に行っていたのである。しかし、蓮如に対して親鸞教学を歪曲していると指摘する人もいる。そのような人達は、蓮如の著述等を表面的にしかみようとせず、それらの背景や言葉に隠

されているものを決してみようとはしない。だからこそ、誤った蓮如理解が生じるのである。

本願寺の再興を志したのが、蓮如十五歳の時である。蓮如が「御再興の上人」や「中興の祖」と呼ばれるゆえんは、よく誤解されがちであるが、親鸞教学の再興こそが主な理由である。親鸞教学の再興、つまり「親鸞にかえる」ということが、本願寺を躍進させた蓮如の力の根底に隠されていたといえる。

以上の点を、本願寺を躍進させた蓮如の力、そしてその根底にあるものとして考える。蓮如の生涯、著述、教学の源には、常に親鸞がいた。その「親鸞にかえる」ことに全力を注ぎ、臨んでいったのが蓮如だといえる。そして、そのうえに蓮如の人間性が加えられ、また時代即応の伝道方法を用いたことにより、本願寺が躍進していったのである。

〈註〉

- (1) 蓮如の生涯については、浄土真宗教学研究所(編)『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』、千葉乗隆『親鸞・覚如・蓮如』、川添泰信「真宗歴代における祖師観の問題―蓮如を中心として―」、笠原一男『乱世を生きる―蓮如の生涯―』によった。
- (2) 『真全』史傳部 二五頁
- (3) 『大系真宗史料』五「拾塵記」一二頁
- (4) 『大系真宗史料』五「蓮如上人遺徳記」四五頁
- (5) 千葉乗隆(編)『本福寺旧記』三二四頁
- (6) 『真宗史料集成』二「天正三年記」四一一頁
- (7) 『蓮如大系』二・一〇六頁
- (8) 山折哲雄・大村英昭(編)『蓮如 転換期の宗教者』一二頁
- (9) 『真宗全』二・二〇一頁
- (10) 『大系真宗史料』五「蓮如上人遺徳記」四五頁
- (11) 『註釈板』一二八三頁
- (12) 菊村紀彦『蓮如―乱世に生きたオルガナイザー』五頁
- (13) 山折哲雄・大村英昭(編)『蓮如 転換期の宗教者』四一頁
- (14) 源了圓『浄土仏教の思想(十二)蓮如』七頁
- (15) 『註釈板』八三五頁
- (16) 稲葉昌丸『蓮如上人行實』「空善記」三六頁
- (17) 源了圓『浄土仏教の思想(十二)蓮如』四頁
- (18) 『註釈板』一二七一頁



- (19) 源了圓『浄土仏教の思想(十二)蓮如』六頁
- (20) 『註釈版』一二八六頁
- (21) 稻葉昌丸『蓮如上人行實』「蓮淳記」六五頁
- (22) 『真宗全』五・三八二頁
- (23) 『蓮如大系』二・四三頁
- (24) 稻城選恵『親鸞教学と蓮如教学の間』六頁―七頁
- (25) 『註釈版』一一一四頁
- (26) 『註釈版』一一九六頁
- (27) 信楽峻磨『歎異抄講義』一二頁
- (28) 稻城選恵『御文章概要―蓮如教学の中心問題―』一頁
- (29) 稻城選恵『御文章概要―蓮如教学の中心問題―』一頁
- (30) 『註釈版』八三一頁
- (31) 『註釈版』一二九〇頁―一二九一頁
- (32) 『註釈版』一〇八三頁
- (33) 林智康『蓮如教学の研究』一六二頁
- (34) 林智康『蓮如教学の研究』九八頁
- (35) 林智康『蓮如教学の研究』九八頁―九九頁
- (36) 『註釈版』八五〇頁
- (37) 『註釈版』一一〇頁―一一〇頁
- (38) 大原性実『講座 親鸞の思想8』一四七頁
- (39) 『註釈版』一一九七頁
- (40) 神子上恵龍『蓮如上人の生涯と思想』一一八頁

- (41) 『註釈版』 一一一九頁
- (42) 『註釈版』 一一一〇頁
- (43) 『註釈版』 一一九六頁
- (44) 『蓮如大系』 二・二一〇頁
- (45) 『蓮如大系』 二・五七頁
- (46) 『蓮如大系』 二・一八五頁

〈参考文献〉

書籍

- ・ 『浄土真宗聖典（註釈版）』 浄土真宗聖典編纂委員会
  - ・ 『真宗聖教全書』 二 宗祖部 真宗聖教全書編纂所
  - ・ 『真宗聖教全書』 五 拾遺部下 真宗聖教全書編纂所
  - ・ 『大系真宗史料』 五 蓮如伝 真宗史料刊行会
  - ・ 妻木直良(編) 『真宗全書』 史傳部
  - ・ 梯實圓・名畑崇・峰岸純夫(監) 『蓮如大系』 二卷 蓮如の教学
  - ・ 堅田修(編) 『真宗史料集成』 二卷 蓮如とその教団
  - ・ 宮崎円遵・神子上恵龍 『蓮如上人の生涯と思想』
  - ・ 稲葉昌丸 『蓮如上人行實』
  - ・ 金子大栄 『真宗の教義と其の歴史』
  - ・ 村上速水・大原性夷・田中久夫 『講座 親鸞の思想 8』
  - ・ 千葉乗隆(編) 『本福寺旧記』
- 
- 本願寺出版社 一九八八年
  - 大八木興文堂 一九四一年
  - 大八木興文堂 一九四一年
  - 法藏館 二〇〇九年
  - 藏經書院 一九一四年
  - 法藏館 一九九六年
  - 同朋舎出版 一九九七年
  - 永田文昌堂 一九四八年
  - 法藏館 一九四八年
  - 百華苑 一九六五年
  - 教育新潮社 一九七八年
  - 同朋舎出版 一九八〇年

- ・笠原一男 『乱世を生きる―蓮如の生涯―』 教育社 一九八一年
- ・稲城選恵 『御文章概要―蓮如教学の中心問題―』 百華苑 一九八三年
- ・稲城選恵 『親鸞教学と蓮如教学の間』 探究社 一九八六年
- ・菊村紀彦 『蓮如―乱世に生きたオルガナイザー』 鈴木出版 一九八八年
- ・源了圓 『浄土仏教の思想(十二)蓮如』 講談社 一九九三年
- ・浄土真宗教学研究所(編) 『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』 本願寺出版社 一九九五年
- ・鎌田宗雲 『御文章解説』 永田文昌堂 一九九七年
- ・山折哲雄・大村英昭(編) 『蓮如 転換期の宗教者』 小学館 一九九七年
- ・林智康 『蓮如教学の研究』 永田文昌堂 一九九八年
- ・千葉乗隆 『親鸞・覚如・蓮如』 法藏館 二〇〇一年
- ・信楽峻麿 『歎異抄講義』 法藏館 二〇〇八年

論文

- ・大原性実 「御文章と異義」 『真宗研究』 第二二二号 一九二九年
- ・梅原真隆 「親鸞聖人と蓮如上人」 『蓮如上人研究』 一九四八年
- ・神子上恵龍 「歎異抄と蓮如教学」 『真宗学』 第四一・第四二号 一九七〇年
- ・稲城選恵 「蓮如教学の背景にあるもの」 『僧伝の研究』 一九八一年
- ・山本仏骨 「蓮如上人教学の総説」 『蓮如上人の教学と歴史』 一九八四年
- ・千葉乗隆 「蓮如上人をめぐる」 『龍谷教学』 第二六号 一九九一年
- ・高橋事久 「歎異抄と御文章」 『龍谷教学』 第三〇号 一九九五年
- ・川添泰信 「真宗歴代における祖師観の問題―蓮如を中心として―」 『真宗学』 第一二六号 二〇一二年